しかし、僕の感じるは、ただ、「しんどい」という言葉。
火口についた時、その深い、崖の穴の中を
見て、さすがの僕も驚異を感じる。
なぜか、吸い込まれるようで、
下に降りて、探検して、もっと
その穴の中に入りたくなった。
危険という感じは全くしない。

「それでも、いつ何時（なんどき）、
爆発が起きて、溶岩や、岩が
降って来て、人が死ぬかも知れん。」
と、そばの、もの売りガイトのおやじが、
たいそうに、この前あった爆発の事故の話を、
聞きたくもないのに、大きな声で説明を始めた。

そのガイドのおやじの商売のうまいのには関心した。
その話の後、「さあ、買って頂戴」と、
記念、みやげの紹介になった。
テレビで言う、ドラマの後のコマーシャル
と言った感じで、僕は、関心してしまい、
二百円出して、絵はがきセット買わされた。

自分でこの曇った風景を撮るよりは、
はがきの方がきれいだと言う。
また、僕はその絵はがきを見た時、観光バスから見た
壮大な景色の印象に似た感じ持ったからだ。

それでも、「二百円かあ」と、後で、「しまった」と思った。